

# ひょうたん島通信

大槌発! 第36回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島(ほうらいじま)という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## ROV、海底をゆく

### 広瀬雅人

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター  
・東北マリンサイエンス拠点形成事業 特任助教

大槌で地元の方や漁師さんとお話していると、「昔はひょうたん島の近くでこんな生き物が採れたんだよ」とか「この場所は昔から豊かな漁場だね」という声をよく耳にします。その度に、実際の海底の様子を見てみたいと思うのですが、深い場所では潜って見に行くこともできません。網にかかった混獲物(食えないものたち)を見ながら、海底の様子に思いを馳せるしかありませんでした。

2015年3月、沿岸センターに遠隔操作無人探査機(ROV)が納品されました。ROVは、モニターに映し出された映像を見ながら船の上からコントローラーで操作する水中探査ロボットです。水深150mまで潜ることができるこの

ロボットを使えば、これまで潜ることができなかった海底の様子を観察することができます。

実際に、これまで何度か大槌湾内や大槌沖でROVを利用した調査を行ってきました。ひょうたん島から南に延びる斜

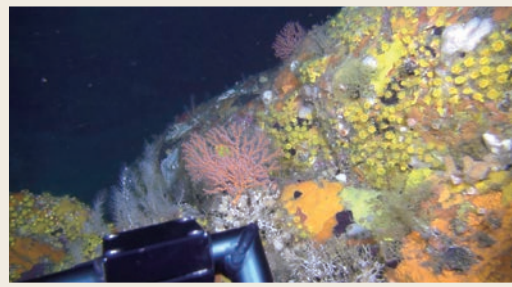


沿岸センターのROV。

面では、30年前に同じ場所で得られたものと同種のコケムシが多数生息している様子が確認されました。また、豊かな漁場として知られる大槌沖の地点では、色とりどりのサンゴの仲間やカイメンが海底を彩っている様子も確認されました。まさに、いつも地元の方々から聞いていた海底の様子をこの目で確認できた瞬間でした。

ROVで海底の様子を観察していると、様々なことがわかってきます。大槌湾口部の海底には、震災前からそこに生息していたと思われる大きな二枚貝やサンゴのような群体をつくるコケムシが確認されました。沿岸域の浅場では津波で大きな攪乱を受けた場所も多く知られていますが、こうした深い海底では当時と変わらず生息してい

ROVで撮影した大槌沖(大根)の海底。



る動物たちもいるようです。これらの殻や骨格に刻まれた年輪に沿って分析を進めれば、さらに多くのことを過去に遡って明らかにすることができるでしょう。

ROVの映像に映るのは、生物だけではありません。根とよばれる切り立った岩盤の谷間には、津波で流されたと思われる人工物や大木などが今も沈んでいます。陸上ではいよいよ復興に向けて区画整備や建物の建設が進み始めていますが、海底では震災当時の姿を残した瓦礫の傍らで、震災前から変わらず生息している生物たちが遅く暮らしているようです。今後はそのような実際の海底の生物の多様性について、地元の方々や子供たちに映像や標本を交えて伝えていきたいと考えています。

## 調査船「弥生のつばやき」 またもや工事のお話です



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

前回の第35回ひょうたん島通信においても工事のお話が出ておりましたが、ついに国際沿岸海洋研究センター研究実験棟の新営工事が始まりました。鉄筋コンクリート造地上3階で、延面積は2686.51㎡、平成29年度内に完成の予定です。新棟の場所は、現研究実験棟から直線距離で200mほど町の中心部よりです。新棟建設予定地は現在更地の状態で、新棟完成後のイメージが難しいところもありますが、どのような建物ができるか

楽しみです。周辺では道路整備や宅地造成が進められ、住宅の新築が始まっている場所もあります。

私、弥生の住処となる係船場の復旧工事も進められております。工事完成後は、同僚であるグランメユ及びチャレンジャー(どちらも船舶の名称です)との共同生活が始まることとなりますが、今から楽しみであると同時に少々緊張しています。西からの寒風吹きすさぶ洋上生活に耐え忍ぶ毎日、もう暫くの辛抱とな

りそうです。



新棟建設予定地です。大槌湾が一望できます。

制作：大気海洋研究所広報室(内線：66430)